

2025(令和7)年度
総合文化学部・地球市民学部
一般入学試験問題
国語
12時～13時

受験についての注意

1. 試験開始の前に、以下の注意をよく読んでおくこと。
2. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開かないこと。
3. この冊子の問題本文は **15 ページ**、**問題は 2 問**である。試験開始後問題を確認し、落丁・乱丁の箇所があるときは手をあげて交換を求めること。
4. 解答用紙は、すべて **H B の黒鉛筆**または **H B のシャープペンシル**で記入すること。
(万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。)
5. 解答用紙は、マーク式解答用紙のみである。試験開始の前に、マーク式解答用紙の定められた位置に氏名及び受験番号をマーク及び記入すること。
6. 解答は、解答用紙の指定された場所にマークすること。余白、裏面には何も書いてはならない。
7. 試験時間中に無断で退場することはできない。
8. 終了の合図があったら、ただちに筆記用具を置き、解答用紙は表を上にして置くこと。この冊子(試験問題)は持ち帰ってよい。

一
次の文章を読んで、あとの設問に答えよ。〔60点〕

日本の伝統文化の中に、二つの対極的なものを見出^{みいだ}そうという試みは、タウトに始まるものではない。その二項対立型日本論の根源にあるのは、日本が中心ではなく辺境に位置し、強力なる中心の影響に犯され、翻弄され続けたという、ある種の被害者意識であり劣等感であると僕は推測する。そしてこの被害者意識は、翻弄されつつも本質においてしなやかであり不変であった日本という一種の選民意識へと容易に反転した。

被害者意識と選民意識とが複雑に入り混じりあったアマルガムは、日本人の心の風景であり続けた。古くは、中国の歴史書にならって漢文で書かれた『日本書紀』の大陸的世界観が、変体漢文で書かれた『古事記』のドメスティックな世界観と対立し補いあった。本居宣長は外来的な儒教の教えを「漢意^{からごう}」として批判し、逆に「もののあはれ」を日本固有の情緒であるとして称^たえ、『古事記』研究にいそしんだ。

その意味でタウトの日本論は、『日本書紀』vs.『古事記』という宣長の二項対立を、無意識のうちに継承したものであった。²彼は宣長を読んではいなかったが、意識しないままに「もののあはれ」を受け継ぎ、庶民文化ともつながる質素な王朝文化を称賛し、後につづく成金的な武家文化を貶^{おとし}めた。

日本の建築論の長い歴史において、この二項対立は繰り返された。数寄^{すき}という美学を完成させたといわれる千利休は、規則正しく柱が立ち並ぶ、書院造のシステムティックな固い形式を批判し、貧しく飾らない民家を賛美した。「もののあはれ」の延長上に、庶民的でやわらかい数寄の美学が生まれた。

明治以降も、この手の二項対立型の排他的な日本論は、手を替え品を替え繰り返された。³「漢意」と「もののあはれ」の一方が賛美され、一方は貶められた。⁴明治に西欧の建築教育を範として、富国強兵のための工学教育の中心地として創立された東京大学の建築学科においては、国家と深く結びついた奈良の古い寺社建築のみが重視され、「もののあ

はれ」を代表する茶室は個人的で趣味的なるものとして、研究の対象とすることさえ認められなかった。一九二〇年設立の京都大学建築学科の基礎を築いたといわれる建築家武田五一（一八七二—一九三八）は、自らは東大出身であったが、東大の歴史観に異を唱えて茶室研究を奨励し、不規則なもの、個人的なるものを重要視する新しい建築教育を、京都の地で創始した。

ただし東大建築学科で教鞭^{きょうべん}をとっていた僕の立場からひと言付け加えさせてもらえば、お雇い外国人のジョサイア・コンドル（一八五二—一九二〇）を中心とする、西欧建築の教育機関としてスタートした工部大学校（後の東京大学）建築学科には、伊東忠太（一八六七—一九五四）という反逆者がいた。伊東は、コンドルを筆頭とした西欧建築中心の「漢意」体制の中で日本建築史をはじめて教え、自らも築地本願寺（一九三四）に代表される、日本⁵ vs. 西欧という分類さえも嘲笑するような独創的建築を設計した。

伊東は法隆寺が日本最古の寺院建築であることを実証的に示し、さらに法隆寺の柱の中心部の膨らみが、古代ギリシャ建築のエンタシスに由来するという説を唱えて（一八九三）、建築界を超えた広い反響を得た。伊東は何の具体的根拠も示さずに突如、このエンタシス説を発表した。にもかかわらず、人々はこの珍説に飛びついたのである。武田五一に通じる京都の和辻哲郎の『古寺巡礼』（一九一九）で紹介されたことで、伊東の珍説は専門家を超えて、人々を興奮させた。

伊東、和辻は西欧世界のコア中のコアであるパルテノンと法隆寺を突然つなげることで、日本建築に光を当てた。タウトは桂離宮、伊勢神宮をギリシャのパルテノンに通じる傑作と断じたが、伊東はタウトのはるか前に、法隆寺の円柱とパルテノンの円柱を強引に結びつけ、西欧に学ぶことを強要させられていた日本人の鬱屈を、一挙に解き放った。⁶

そのようにして日本建築⁷は、西欧人からは自分探しの鏡として、日本人からは自己肯定の材料として、たびたび光を当てられ、一種の精神安定剤としてしばしば利用されてきたのである。西欧に限界を感じた不遇の西欧人のフラス

トレーションと、西欧の輸入に不満と屈辱を感じた日本人のフラストレーションとが響きあい、熱く盛り上がる。タウトと伊東忠太は、西欧化がもたらす大きな社会的ストレスのもと、同型の心理的仕掛けを用いて西欧と日本をつなぎ、西欧化に疲れた日本人の喝采を浴びたのである。

そしてその「日本発見」のあとで、伊東とタウトは、その喝采の責任をとるかのようにして、日本とギリシャを、つなぐ中間項を探る旅にでた。伊東は、留学先はヨーロッパしか認めないという当時の明治政府の方針に反して、中国、インド、トルコへと旅し、さらにアジアへの調査旅行を敢行した。タウトは日本滞在の後トルコに移り、トルコ大学で教鞭をとって、日本風の八角屋根の載った不思議な自邸をボスポラス海峡の見える丘の上に設計し、日本と西欧との中間項の具体化に挑みながら、その志半ばで、八角堂を残してトルコに客死した。

和辻、武田に代表される反中心的な京都の空気の中で生まれた日本インターナショナル建築会が、左のタウトを日本に招待し、タウトが彼らの案内で桂離宮を訪れたことは一種の歴史の必然であったようにも感じられる。フォルマリズムとはなじまなかったウィーンのヨゼフ・ホフマンの下で学んだ建築家、上野伊三郎（うえの いさぶろう）（一八九二—一九七二）を中心とするインターナショナル建築会の、反中心的で反「漢意」的な空気がナチスを追われた左のタウトと共鳴したのである。その共鳴が、最終的にはタウトを中間項の追究へと向かわせた。

（隈研吾『日本の建築』より）

（注）○タウト——ブルーノ・タウト。東プロイセン、ケーニヒスベルク生まれの建築家。初期のモダニズム建築のリーダーで、「モダニズムの巨匠」としてル・コルビュジエと並び称された。

○アマルガム——水銀と他の金属との合金の総称。「混合物」一般を指すこともある。

○ドメスティック——家庭内の、国内の、国産の。

○エンタシス——上方が細くなる円柱の中ほどにつけたわずかなふくらみ。視覚上の安定感を与えるために施す。ギリシア・ローマ・ルネサンス建築の柱に用いられた。

○左——急進主義を「左翼」と呼ぶことがあり、ここではそのような意味で「左」と表現している。

○フォルマリズム——一九一〇年代から二〇年代末にかけて、ロシアの文学研究者や言語研究者によって推進された文学・芸術運動。

問1 傍線部1「いそしんだ」とあるが、「いそしむ」を使った文として最も適切なものを、次の①～⑤の中から

一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① パンの販売を始めたので宣伝活動にいそしんだ。
- ② 子供達がいそしむ公園を整備した。
- ③ 自分が好きなアニメのイベントにいそしんで出かけた。
- ④ 定年後も夫は一年中何かといそしんでいる。
- ⑤ 歌舞伎の幕間に好きなお弁当をいそしんだ。

問2 傍線部2「彼は宣長を読んではいなかったが、意識しないままに「もののあはれ」を受け継ぎ」とあるが、タ

ウトが、宣長の「もののあはれ」に近い考え方をしている理由は何か。本文全体をふまえ、最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 宣長に影響を受けた平田篤胤あつたねの著した本を多く読んでいたから。
- ② 宣長をとりまく状況とタウトをとりまく状況とが対照的だったから。
- ③ 西欧の限界を感じていたタウトが、反「漢意」的なものに共鳴していたから。

- ④ タウトは自国の伝統文化の中に、自分自身の心の風景を見出そうとしていたから。
- ⑤ タウトの西洋中心主義と宣長の日本中心主義とが重なり合っていたから。

問3 傍線部3「漢意」と「もののあはれ」の一方が賛美され、一方は貶められた」とあるが、次のア～オの中で、「漢

意」の側にたつものは①を、「もののあはれ」の側にたつものは②をマークせよ。

ア 上野伊三郎 イ コンドル ウ 東京大学の建築学科 エ 武田五一 オ 本居宣長

問4 傍線部4「範」と入れ替えることができない、語を次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 模範 ② 手本 ③ ひな型 ④ モデル ⑤ 範囲

問5 傍線部5「日本vs.西欧という分類さえも嘲笑するような独創的建築」とあるが、どのような建築ととらえれば

よいか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 日本建築も西欧建築も否定するような建築。
- ② 日本建築に西欧建築のいい点を取りこんだ建築。
- ③ 日本と西欧のいい点をそれぞれとりこんだ建築。
- ④ 日本、西欧以外の地域の建築の要素を取り入れた建築。
- ⑤ 日本、西欧と二項対立的に分けることを超えた建築。

問 6 傍線部 6「日本人の鬱屈を、一挙に解き放った」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを、次の①～⑤

の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 伊東忠太の説が、タウトの説よりも説得力があったから。
- ② 伊東忠太の説が、専門家を超えて世界中の人々に受け入れられたから。
- ③ 伊東忠太の説が、これまでの日本建築の低迷ぶりを人々に意識させたから。
- ④ 伊東忠太の説が、提示された一八九三年は、日本が戦争状態にあったから。
- ⑤ 伊東忠太の説が、日本が西欧に学ばざるを得なかった時期に提示されたから。

問 7 傍線部 7「日本建築は、西欧人からは自分探しの鏡として、日本人からは自己肯定の材料として、たびたび光

を当てられ」とあるが、西欧人が日本建築を「自分探しの鏡」とするというのは、どういうことか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 古代ギリシャ建築が法隆寺の建築に影響を与えているように、日本の中には西欧が溶け込んでいるということ。
- ② 西欧文明の影響を受けていない日本が、西欧文明のルーツを考えるのにふさわしいということ。
- ③ 西欧に限界を感じた西欧人が、西欧をとらえるための材料として日本をみるということ。
- ④ 西欧の根源的なものを、西欧の内部に見出すのは難しいということ。
- ⑤ 西欧建築よりもすぐれた建築が日本には古くからあるということ。

問8 傍線部8「伊東とタウトは、その喝采の責任をとるかのようにして」とあるが、どのような責任か。最も適切

なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 日本の建築をパルテノンの上位に置いた責任。
- ② アジアの文化的価値を調査していなかった責任。
- ③ 根拠も示さずに日本の建築をパルテノンと結びつけ、人々に影響を与えた責任。
- ④ 伊東の主張もタウトの主張も心理的仕掛けにすぎないことの責任。
- ⑤ 西欧のフラストレーションを、「珍説」によって解消してしまった責任。

問9 次のア～オについて、この文章の内容と合致するものには①、合致しないものには②をマークせよ。

- ア 日本の外の文化を意識することが日本文化の特徴の一つといえる。
- イ 日本建築は、日本人の自己肯定のために使われることがしばしばあった。
- ウ 明治以降は、西欧文明が流入してきたために、二項対立的な考え方が強くなった。
- エ 伊東忠太は、日本建築に光を当てるような説を唱えた。
- オ タウトは二項対立的な考え方を避けようとしていたが、結局はそこから逃れられなかった。

二

次の文章を読んで、あとの設問に答えよ。〔40点〕

体を覆っていた不快な粘液が洗い流されていく。

孵化したばかりのヒヨコがねつとりと濡れていると知ったとき、少し失望したことを覚えている。あの硬質な殻の中から出てくるヒヨコですら、生物としての湿り気と無縁ではいられないのだ。

髪の毛を拭きながら、廊下の電気のスイッチに手を伸ばした。電気は点かなかった。何度か試したけれど、廊下は暗いままだ。洗面所から漏れる四角く白い光の中で、私の影が壁にぶつかって奇妙な形にねじ曲がっていた。

最後にこの電球を替えたのは母だった。一時退院してきた母は、家の中の細々したことを点検した。テレビの上に積もった埃を拭き、つまり気味だった台所の排水口に液体状の薬品を流し入れ、父のワイシャツにアイロンをかけ直した。そして、「なゆちゃんとお父さんは、私がいないと本当に駄目なんだから」と言って笑った。私も、「そうだね」と笑ったが、**A**。父と私は、母がいらない生活にもそれなりに慣れ、居心地よく日々を送っていた。テレビに埃が積もっても、流しがつまり気味でも、ワイシャツにちよつと皺が寄っていても、べつに気にもならなかった。

私の制止も聞かずに、母は一日かけて **B** と、疲れたのかリビングのソファに座った。久しぶりに母のいる部屋の風景に、私はもじもじとしてリビングの入り口に立っていた。

「学校お休みさせちゃって、なゆちゃんには悪かったわね」

「堂々と休めて私は嬉しいけど」

「そう?」

母の声に力がなかったので、私は急いで話題を変えた。

「お兄ちゃん遅いな。もう帰ってきてもいいころなのに」

そう言つて何気なく廊下の電気のスイッチに触れたら、電球が切れていた。そういえば何日か前から点かなくなつていたが、父も私も放つておいたのだ。

「あら、電球切れてるの」

母は目ざとく気がついて、ソファから立ち上がった。

「私がやるよ」

椅子を運ぼうとする母を慌てて止めた。私が椅子を運び、新しい電球を戸棚から出すのを、母はじつと見つめていた。そして私が椅子に上ろうとするのを、「落ちたら大変だから」と押しとどめた。

「なゆちゃんはお母さんがいないと駄目ね」

母はもう一度そういった。その声は静かで、感想を述べているのとも、私に念押しをしているのとも違うようだった。人に呪いをかけるとき、もしかしたらあんな声音と抑揚になるのかもしれない。私を構成している小さな粒。その粒の微細な波動をなぞるようにして、母の乾いた声は私の膚はだの下にもぐりこんだ。

私は母の静けさに押し切られるようにして場所を譲り、電球を取り替えている母の乗る椅子を支えた。

夕方というには遅い時間になって、前後するように兄と父が帰ってきた。私たちは近所にある小さなレストランに行つた。兄は大学での生活と慣れない一人暮らしの様子を面白おかしく語ってきかせ、母と私は笑つて、うまく料理を食べられないほどだった。父は珍しく、兄につきあつて少しアルコールに口をつけた。父と兄の皿が空に近づいているのを見て、私も急いで料理を詰めこんだ。母は、最後まであまり料理に手をつけなかった。そのことに私たちは気がついていただけれど、それを指摘する者は誰もいなかった。

それが、家族が揃そろつて食べた最後の夕食になった。

母は翌日には病院に戻り、長いのか短いのかわからない何度目かの入院ののち、四十八日前に死んだ。すぐに焼か

れて灰になり、それは何の変哲もない墓石の下に収められた。葬式はしなかった。お経も上げなかったし、戒名もない。父はいつさいを迷いなく執り行い、兄と私を連れて、墓苑^{ぼえん}管理者の立ち会いのもと、母を埋葬した。父と母のあいだで、かねてから死後の段取りが決められていたらしいことを、そのとき初めて私は察した。

父は立ち上がり、振り返って墓石を背に私たちに向き直った。

「お母さんは死んだ」

と父は言った。兄はまた少し泣き、私は何日間か泣きどおしで腫れてしまったまぶたを重くしばたいた。父は墓苑の人に礼を言くと、私たちの脇をすり抜けてさっさと歩いていつてしまった。管理人はあつけに取られたように、墓の前に立っている私たちと父とを見比べていた。

体よく管理人を追い払い、兄と私は縁石に腰を下ろした。お互いに、父を一人にしておこうと思っていることが感じ取れていた。兄は煙草に火を点け、立ち上がって風下に移動すると、また座った。私たちはしばらく黙っていた。足もとを蟻が歩いていた。口には、どこかに供えられていた菓子の小さな欠片^{かけら}をしっかりとくわえている。うつむくとなおさら重いまぶたに邪魔されながら、ピンク色の菓子を運んでいる蟻を目で追った。

「そろそろ行こうか」

墓石を眺めながらゆっくりと煙草を二本吸い終えた兄は言った。兄の背後に、梅雨も終わろうとしている晴れた空が広がっていた。

父は駐車場に停めた車の中で、ハンドルに手をかけて運転している時のようにまっすぐな姿勢で座っていた。窓は全部開けられていた。父は私たちの姿を認めると、エンジンをかけ、窓を閉めてエアコンを作動させた。後部座席に乗りこんだ兄と私に、父は、「もういいのか」と聞いた。お父さんこそ、³と思ったが私は黙ってうなずいた。

「じゃあ帰ろう」

と父は言い、私たちは墓地を後にして山を下った。

母が死んでも、それまでの父と二人の生活にはあまり影響がなかったから、私は時々、母が死んだことを忘れてしまふ。最近では母がいたことすら、幻か昨日見た夢のように不確かな気がしてきた。

だが、こうして電気の点かなくなった廊下にたたずむと、母がもういなくなってしまったのだということ、気配すらも薄らぎつつあるのだということが、身の内に雪のように静かに降りつもる。

入院しがちで、母はこの家にはあまりいなかった。まだ死んで一ヶ月半ほどだというのに、母の痕跡はこの家から急速に消え去りつつある。今また一つ、母がこの家で生きて動いていた証が消えた。消えることによって、確かにここに母がいたのだということを私に知らしめるこの

C

母は夢でも幻でもなく存在し、ここに住む父と私のために電球を取り替えた。そして死んだ。もう会えない。悲しくなつて、私は少し泣いてしまった。母の痕跡が消えるたびに私は泣いた。消失によってしか死を確認できない自分が悲しくて泣いた。

母の呼吸が消えて泣いた。肉体が消えて泣いた。肉体を構成していたものの残滓^{ざんし}が土の中に消えて泣いた。母の痕跡はどんどん小さくなつていき、今では廊下の電球になつてしまった。そのうち痕跡は気がつかないほどに小さくなり、私は涙を流すこともなくなるのだろう。

消失に気づけないほどの消失。それは最初から無かつたことと同じではないのか？

冷蔵庫からペットボトルを取りだし、コップに注ぐのが面倒で直接口をつけて茶を飲んだ。扇風機に当たりながらニュース番組を見る。白いレースのカーテンが船の帆みたいに膨らみ、わずかな時間そのまま静止し、急速にしぼんで網戸に張りついた。

問1

空欄

A

に当てはまる最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 父は笑わなかった
- ② 内心恥ずかしかった
- ③ 泣きそうだった
- ④ それは嘘だった
- ⑤ 寂しさも感じた

問2

空欄

B

に当てはまる最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 家を徹底的に無機質に磨き上げる
- ② 家を家族の好みに合わせて整える
- ③ 家を自分の満足のいく状態にする
- ④ 家から自らの生の痕跡を消し去る
- ⑤ 家族が占領していた家を取り戻す

問3 傍線部1について、私はなぜ「もじもじとして」いたのか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、

その番号をマークせよ。

- ① 体調が悪いのに立ち働いている母が心配だったが、口を出すのも悪い気がしたから。
- ② しばらく離れていた母に思い切り甘えたかったが、少し気恥ずかしくもあったから。
- ③ 不在だった母が家で普通に家事をするという状態に慣れることができなかったから。
- ④ 母がいないあいだ、いい加減な生活態度をしていたことを申し訳ないと思ったから。
- ⑤ そのままでも平気なのに、余計な家事をする母に苛立ちを覚え、迷惑に感じたから。

問4

傍線部2「母の乾いた声は私の膚の下にもぐりこんだ」とはどういうことか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 自分の存在価値や存在意義を押しつけようとする母の傲慢さが私を内側から蝕んだということ。
- ② 自身の生の意味を問うかのような母のことばが私の心身に否応なく刻みつけられたということ。
- ③ 日常の営みの中に自分の痕跡を娘に残そうとする母の願いがかえって私を傷つけたということ。
- ④ 私の自立や自由を妨げようとする呪いのような母のことばが私の身心にしみ渡ったということ。
- ⑤ 死にゆく者の悲しみが生きている者を拘束することの残酷さを私が思い知らされたということ。

問5 傍線部3について、私はなぜ「お父さんこそ」と思ったのか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 父が思いの外、母の死を悲しんでいない様子を見せたことを不思議に思ったから。
- ② 母の埋葬をてきぱきと進める父がまだ本当には母の死を悼むことができていないことを心配したから。
- ③ 早々に母の墓地から去ろうとする冷静な父の姿に娘としてやや反発を覚えたから。
- ④ 母の死から目を背け続けている父はもつと現実と向き合うべきだとうながしたかったから。
- ⑤ 事務的に母の埋葬の手続きを進めることで悲しみを紛らわそうとしている父に安心したから。

問6 傍線部4について、この場合、母の「証」とは何を指すか。最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 誰も座っていないソファ
- ② ワイシャツの皺
- ③ つまり気味の排水管
- ④ テレビの上の埃
- ⑤ 廊下の電球

問7 空欄Cに当てはまることばとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 現実
- ② 矛盾
- ③ 空虚
- ④ 錯覚
- ⑤ 調和

問 8

右の文章の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 湿り気を帯びた生と無機質な死の二項対立をいくつかのバリエーションによつて浮かびあがらせている。
- ② 妻の死を事務的に淡々と受け止める父と、母を恋い悲嘆に暮れる娘の対比構造が遺憾なく描かれている。
- ③ 生きた痕跡を家事という日常的行為を通して娘の記憶に刻もうとする母の思いが切々とつづられている。
- ④ 人が生きた証がその肉体の消滅と共にいとも簡単に消失してしまう不気味さがとつとつと語られている。
- ⑤ 死者の記憶が次第に薄れていく悲しみと喪失感を電球やワイシャツなど日常の一コマの中で描いている。